Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

# 名古屋方言における埋め込み疑問文の解釈と音調 ： 方言音調体系と統語・意味構造に着目して

田中，真一
松井，理直

(Citation)
神戸言語学論叢,15:23-35

(Issue Date)
2026-03-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100502629

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100502629

神戸言語学論叢 第15号
2026年 (令和8年) 3月
23–35頁

Kobe Papers in Linguistics Vol. 15
March 2026
pp. 23–35

# 名古屋方言における埋め込み疑問文の解釈と音調
## ―方言音調体系と統語・意味構造に着目して―

田中 真一・松井 理直

神戸大学・大阪保健医療大学

## 1. はじめに

本稿は、音調と統語・意味構造との対応関係について、とくに埋め込み疑問文解釈と方言音調体系との関係に着目して論じる。名古屋方言話者二世代における疑問文解釈の方策を、先行研究で示された東京方言、さらには、関西・佐賀方言の分析 (松井・田中 2025, 2026) と対照しながら検討する。

音調に関して (a) WH要素のアクセント、(b) 埋め込み部文末詞の音高、(c) 主文述部fo抑制 (ダウンステップ) の有無、(d) 文末上昇・下降音調といった4条件、また、統語・意味構造に関して(e)埋め込み部文末詞の統語・意味機能の計5条件を制御した刺激文をもとに、方言間・世代間における疑問文解釈の異同を分析する。

結果として、名古屋方言においては、条件 (c) 主文述部fo抑制と (d) 文末イントネーションが顕著に、また、(e) 埋め込み部文末詞の統語・意味機能が疑問文解釈に影響を与え、(a) WH要素のアクセントはほとんど影響を与えないことを報告する。とくに、名古屋方言において従来検討されてこなかった (c) fo抑制については、東京方言と同様にWH解釈を促進することを新たに示す。また、(d) 文末ピッチの上昇／下降は (他方言とは異なり) 疑問文解釈の重要な手掛かりとなり、それが伝統的な名古屋方言における単純疑問文の音調と対応することを指摘する。同時に、若年話者ではその影響が相対的に弱まること、それが同方言における疑問文音調の変化と関係することを示す。

## 2. 背景：埋め込み疑問文解釈と名古屋方言音調体系

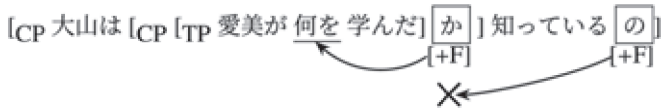
### 2.1. 埋め込み疑問文解釈と音調

東京方言における統語情報と音調との対応については、Poser (1984) や Pierrehumbert & Beckman (1988) , Selkirk & Tateishi (1991) などによる先駆的な研究を経て、現在も様々な観点から分析されている。本研究が対象とするWH埋め込み疑問文と音調との対応関係について、西垣内・日高 (2010) は、(1) の埋め込み疑問文が (1a) の真偽疑問文 (YNQ) としても (1b) の疑問詞疑問文 (WHQ) としても解釈され得ることを示し、両者が韻律の違いとして実現することを指摘している。

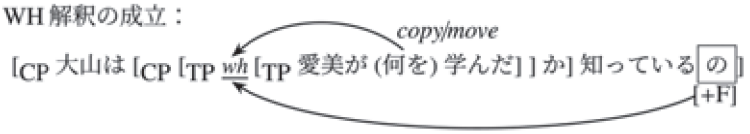
(1) 大山は愛美が何を学んだか知っているの？ a. うん、知っているよ (YN解釈)
b. 言語学だよ (WH解釈)

Ishihara (2005) によると、東京方言では統語構造の違いが (1) における2通りの解釈をもたらすとともに、その違いが韻律に対応するという。(2a) のようにWH要素が埋め込み内の元々の位置にある時、WH要素は埋め込み内の主要部にあたる助詞「か」から焦点素性 [+F] を受け取るのに対し、主文主要部である文末詞「の」は、phase不可侵条件 (島の制約) によってWH要素に [+F] 素性を付与することができず、結果としてYN解釈 (1a) をもたらすとする。この時、韻律面では (3a) のようにWH要素と埋め込み部文末詞「か」が埋め込み文内でPFに影響を与え、埋め込み部と主文述語とが別々の中間句 (intermediate phrase: ιP) を形成するShort Emphatic Prosody (Short EPD) として実現される (主文でfoの立て直しがある)。これに対し (2b) のようにWH要素が統語的により高い位置に付加されると、WH要素は主文文末詞「の」からの [+F] 付与が可能となり、(1b) のWH 解釈をもたらす。この長距離に渡る統語領域がPFで解釈されると、(3b) のようにWH要素から主文述語までがfo抑制により一つの音調にまとまり、Long Emphatic Prosody (Long EPD) として実現される。

(2) a. YN 解釈の成立：




b. WH 解釈の成立：




(3) 韻律構造
a. YN解釈: 大山は愛美が なにを学んだか 知っているの↑ (Short EPD)
b. WH解釈: 大山は愛美が なにを学んだか 知っているの↑ (Long EPD)

なお、(3b) の音調が成立するためには、主文述語 ((3)では「知っているの」) のfo抑制に対し、直前の埋め込み部のどこかにピッチ下降が必要である。東京方言においては、それはWH要素 ((3)では「なに」)のアクセント (語彙的ピッチ下降) という音声的卓立によって実現されている。仮にWH要素にアクセントがない場合、後述図2のように後続要素が高ピッチで結びつきやすくなり、そうなるとfo抑制が実現できなくなる。

### 2.2. 名古屋方言・諸方言の音調体系: 問題の所在と予測 (1)

しかしながら、東京方言以外の多くはWH要素が無核でピッチ下降を伴わないことが多く、後続要素にfo抑制が生じにくい。つまり「フォーカス部 (疑問詞)＋非フォーカス部 (述部)」に対し「fo卓立＋fo抑制」といった文法・韻律の間の対応関係が成立しにくい。この点について疑問詞疑問文に関し、本研究および松井・田中 (2025, 2026) で扱う諸方言の関係を表１にまとめる。

表１. 疑問詞疑問文 (WHQ) の方言音調体系

| | a. WH要素の ピッチ下降 | b. WH要素の 初頭のピッチ | c. 述部fo抑制 | d. 文末上昇 下降の区別 |
|---|---|---|---|---|
| 東京 [東京式] | 必ず ○ | 必ず高 （初頭アクセント） | 必ず○ | × |
| **名古屋 [東京式]** | **単独形は× (結合形は○も)** | **重音節→ 高 (どう) 軽音節→ 低 (なに)** | **疑問詞単独形直後→ × (結合形は○も)** | ○ **YNQ↑ WHQ↓** |
| 関西 [京阪式] | 単独形は× (結合形は○も) | 高起式 低起式 | 疑問詞単独形直後→ × (結合形は○も) | × |
| 佐賀 [無アクセント] | × | × | × | × |

本論で扱う疑問文解釈の着眼点および予測を示すと、東京方言は表1(a)のようにWH要素が全てアクセントを持つため、表1(c) のように後続述部のfo抑制 (ダウンステップ; downstep) が生じる (Pierrehumbert & Beckman 1988)。これに対し、名古屋方言をはじめ表1の他方言において、WH要素は単独では無核でピッチ下降を伴わず、一見するとダウンステップが生じにくい韻律構造となる。このため、例えば以下の図1 (YNQ)、とくに図2 (WHQ) の名古屋方言のように、WHQでは文法的フォーカス部(FOC)・非フォーカス部がそれぞれ音声的卓立 (高音調：H)・非卓立と対応せず、両者が表面上ミスマッチを見せる (田中2021)。[1, 2]

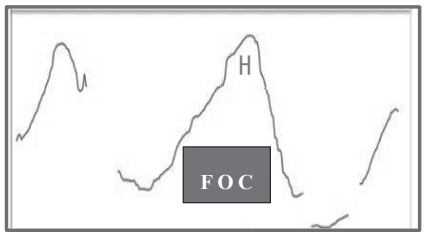



**図1. 名古屋方言YNQ (何か読んどるの？)**

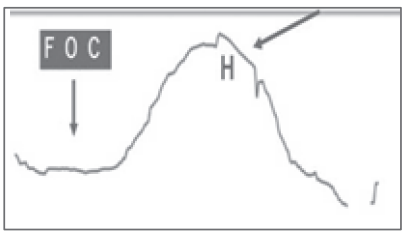



**図2. 名古屋方言WHQ (何を読んどるの？)**

しかしながら、埋め込み疑問文においては、次節 (5) の文のように、埋め込み部文末詞「か」や「って」が低接することにより、主文述部にfo抑制が生じる、すなわちダウンステップが生じる韻律構造が生起可能となる (詳細は3.1節で述べる)。

従来の研究では、名古屋方言において図2のピッチパターンがWHQの音調とされ、このため、述部のfo抑制およびその疑問文解釈との関係については全く検討されてこなかった。本研究では、名古屋方言のWHQにおいても、主文述語のfo抑制が見られることを新たに示すとともに、それが疑問文解釈に関与することを示す。

また、図1, 2の通り名古屋方言では文末音調がYNQとWHQとで異なり、YNQ (図1) は上昇音調、WHQ (図2) は下降音調を伴うことが知られている (犬飼2006, 田中2021)。これを理論的に解釈すると、同方言において文末詞「の」は統語・意味情報加え、上昇・下降調という韻律情報も焦点[F]の解釈に関係する、つまり、上昇調 (↑) は直前の述語部分への焦点と結びつく韻律であるのに対し、下降調 (↓) は疑問詞部分への焦点と結びつく韻律と解釈可能である。以上より、名古屋方言では、表1 (c) のfo抑制に加え (d) の文末上昇・下降の別が (1), (2) の疑問文解釈に対して重要な情報になることが予測される。

この点に関して、名古屋方言の疑問文末音調には世代差も報告され、若年話者はWHQに対してもYNQと同様に上昇調を許容する、つまり、両タイプの疑問文が文末音調によって区別されなくなってきているとの指摘がある (田中2024, 田中・松井2025)。このような、文末上昇・下降音調の区別および世代間変化が、(1) に見られる埋め込み疑問文解釈にどのように影響するのかも分析対象とする。そして、文末音調も、とくに中高年話者において解釈の手掛かりとして作用し、若年話者ではその傾向が相対的に弱まることを報告する。

また、疑問詞部分の音調も検討する。名古屋方言において疑問詞は、他の語・句と同様、(4a) のように初頭が重音節の場合は高ピッチで、(4b) のようにそこが軽音節 (または促音を含む2モーラ音節) の場合は低ピッチで開始するという特徴を持つ (水谷1960, 吉田2017, 田中2021)。また、上述の通りWH要素単独形は全て基本的に無核で生起するが、複合形においてのみ (4a)「どんな－も’ん」のように、WHに結合する語にアクセント (’) があれば全体が有核として生起する。

(4) a. 重音節：どう、どんな、 (複合形 有核) どんな－もん
b. 軽音節：なに(を)、だれ(が)、どこ(から)、 (促音2モーラ音節) どっち(へ)

これらの疑問詞について音声的卓立という点から解釈すると、初頭が高ピッチ (高起) と低ピッチ (低起) では前者がより卓立性が高い。よって、WH要素が有核 (語頭アクセント)、高起無核、低起無核の順にその卓立性が高いと予測できる。これら3種の組み合わせを次節の刺激文 (5a) から (5c) として設定する。

以上の観点および予測にもとづき刺激文の条件を、以下の統語・意味的観点とともに統制し分析を行う。

### 2.3. 補文標識の統語・意味構造: 問題の所在と予測 (2)

次に統語・意味的側面について検討すると、先行研究で用いられた文末詞「か」や「の」はいずれも未知情報 (非共有情報) を表すものであり、この点で焦点 [+F] 素性を持つと考えてよい。これに対し文末詞「って」は既定性 (有田2007) の高い情報である引用句 (三枝1997) を形成する標識である。したがって、焦点素性を持たない [-F] と解釈できる。

これまで述べたように、先行研究では (1), (2) のように埋め込み部末尾の補文標識として [+F] を持つ「か」のみが用いられており、[-F] を持つ「って」のような補文標識については検討されていない。しかしながら、前節の議論から再検討すると、埋め込み部末尾に [-F] の「って」を伴う場合、(1a) のようなShort EPDは生起しにくく、(1b) のようなLong EPDを伴うことが予測される。そこで本稿では、埋め込み文の種類にも着目し、上記の音調との関係と組み合わせて条件を統制し、疑問文解釈のメカニズムを分析・検討する。

## 3. 調査

### 3.1. 刺激文

上記を踏まえ5つの条件、(a) WH部の音調 (ピッチ下降有無、高起/低起) 、(b) 埋め込み部文末詞の音調 (高接/低接)、(c) 主文述語fo抑制 (有/無)、(d) 文末音調 (上昇/下降)、(e) 埋め込み部文末詞の意味 (+F (か) /-F (って)) を統制した刺激文を作成した。関西・佐賀方言の埋め込み疑問文と可能な限り共通の語例・音調とし、方言間の対照も視野に入れ作成した (関西・佐賀方言の音調・文法的特徴と刺激文については松井・田中 (2025, 2026)を参照)。

(5) のように、WH部分の音調について、高起有核 ((5a) どんなーもん)、高起無核 ((5b) どう)、低起無核 ((5c) なにを) の3種に分けて作成した (条件 (a))。また、埋め込み部分末詞に「か」と「って」を設定し (条件(e))、このうち「か」については高接 (か) と低接 (か) の2種を、「って」については (高接が存在しないため) 低接 (って) のみを設定した (条件(b))。さらに、低接形に後続する主文述語「聞いとる」に対し、fo抑制を伴う音声と伴わない音声を作成した (条件 (c)) (文末詞の低接によって初めて後続主文述部のfo抑制が可能となる)。上記に対し文末上昇・下降音調を設定し (条件 (d))、これらの条件 (a)〜(e) の掛け合わせにより、30種の刺激文を作成した。

(5) 刺激文 (30例)

a. WH高起有核: 10例 (文脈：車のラッピングのことだけど)
大山は愛美が どんなもんで覆う {か／か／って}{聞いとる／聞いとる} {の↑／の↓}?

b. WH高起無核: 10例 (文脈：クラブ活動の洗濯物のことだけど)
大山は愛美が どう洗う {か／か／って}{ 聞いとる／聞いとる} {の↑／の↓}?

c. WH低起無核: 10例 (文脈：授業選択の噂だけど)
大山は愛美が なにを学ぶ {か／か／って}{ 聞いとる／聞いとる} {の↑／の↓}?

### 3.2. 被験者と手順

名古屋方言の中高年話者8名、若年話者16名、計24名を被験者とした。中高年話者は54-55才 (男性5名、女性3名) で、全員が中区大須または栄で生育し同地に在住している。若年話者は19-22才 (男性6名、女性10名) で、名古屋市およびその周辺地域に生育・在住している。

各被験者には、(5) の各刺激音声に対し、YN解釈として「うん、聞いとるらしいわ」という共通の回答を、そしてWH解釈として「(5a) の答：ビニールでらしいわ」「(5b) の答：手洗いしてくれるらしいわ」「(5c) の答：言語学らしいわ」という回答を文章で提示し、YN解釈／WH解釈それぞれの自然性を独立に7段階 (自然7—不自然1) で判断させた。被験者の反応は、一般化線形混合モデルとロジスティック回帰モデルおよびクラスター分析を用いて処理を行い、各世代における疑問文解釈の主要因を抽出した。統計上の数値がやや複雑なため、次節では主に散布図を用いた説明を行う。

### 3.3. 結果・分析

30の刺激文と24名の被験者により720例が得られた。表2は、(5) により制御した実験条件とマーカーとの関係を示し、図3,4はそれぞれ中高年話者・若年話者のYN/WH解釈に対する自然性判断の値を散布したものである。なお、図中では表2の各マーカーに対して3つずつ値がプロットされているが、これは例文 (5a-c) の疑問詞3種に対応する。これら3種 (5a-c) の違いは結果に影響を及ぼさなかったため、以降、条件 (a) は分析の対象外とする。

表2. 散布図マーカー

| 条件 | (e) | 助詞か | | って／て | |
|---|---|---|---|---|---|
| (c) | (d) (b) | 高接 | 低接 | 高接 | 低接 |
| 抑制なし | 文末上昇 | か↑ | カ↑ | て↑ | テ↑ |
| | 文末下降 | か↓ | カ↓ | て↓ | テ↓ |
| 抑制あり | 文末上昇 | | ㋕↑ | | �те↑ |
| | 文末下降 | | ㋕↓ | | �те↓ |

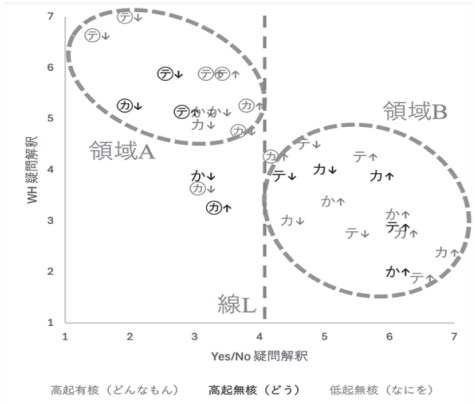


図3. 音調と疑問文解釈(名古屋中高年話者)

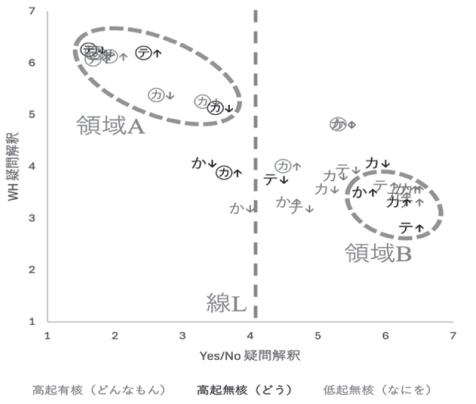


図4. 音調と疑問文解釈(名古屋若年話者)

図3, 4から、YN解釈とWH解釈が逆相関、つまり片方の数値が上がるともう片方の数値が下がる相補的分布を成していることがわかる。この相関は (最高・最低点の分布からも) とくに中高年話者 (図3) において強く見られる。以下、各条件との関係を分析する。

名古屋方言中高年話者において、WH解釈 (領域A) の条件として「埋め込み助詞「って」」かつ主文述語fo抑制あり (○印)」が主要因であり ($p<0.01$)、この場合、文末上昇／下降の別は関わらない。その次に「埋め込み文末詞「か」かつ文末下降↓」もWH解釈の条件として働く ($p<0.05$)。

YN解釈 (領域B) の条件として「主文述語のfo抑制なし (○印なし)」が主要因 ($p<0.05$) で「文末ピッチの上昇↑」も要因となる。このような文末音調の作用 (条件(d)) は、関西方言や佐賀方言 (松井・田中2025, 2026) には見られない特徴であり、この点で名古屋方言における文末音調の非対称性が疑問文解釈に影響することを示している。なお、先述の通り、WH解釈とYN解釈いずれにおいても、WH要素の音調 (条件(a)) はほぼ無関係であることが確認できる。この点においては、関西・佐賀方言と共通する。

次に若年話者 (図4) を確認すると、YN解釈とWH解釈は逆相関を成すが、それは相対的に中高年話者 (図3) より弱い。若年話者におけるWH解釈の条件は「埋め込み助詞「って」かつ主文述語のfo抑制あり (○印)」($p<0.05$)、そして「埋め込み助詞「か」かつ文末下降↓」($p<0.05$) であり、この2条件は中高年層と同様である。YN解釈条件の主要因として「主文述語のfo抑制なし」という点は中高年話者と共通するのに対し、文末上昇の効果は弱く、この点において中高年層と若干異なる分布を示した。なお、若年話者においてもWH要素の音調 (条件(a)) は疑問文解釈に対しほぼ無影響であった。

## 4. 主文fo抑制と文末音調

ここで、疑問文解釈に影響する主文fo抑制 (条件 (c))と文末音調 (条件 (d)) との関係ついて検討する。表3, 4はそれぞれ中高年話者と若年話者の、上記を掛け合わせた4条件下におけるYN解釈とWH解釈の自然性平均値を示したものである (他の条件 (a), (b), (e) については考慮せず、一つにまとめている)。**二重下線**は、YN解釈またはWH解釈に対する自然性の値がもう片方 (点線隣) を大きく引き離しているもの (数値の差が概ね1.2以上のもの)、下線は差が比較的大きいもの (0.8〜１.1程度) を示している。

表3. 主文fo抑制 (±)・文末音調 (上昇・下降) と疑問文解釈：名古屋方言中高年話者

| 文末音調＼主文fo抑制 | 主文fo抑制 (−) | | 主文fo抑制 (＋) | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | YNQ | WHQ | YNQ | WHQ | YNQ | WHQ |
| 文末上昇 (↑) | **6.07** | 2.94 | 3.52 | **4.94** | **5.05** | 3.74 |
| 文末下降 (↓) | 4.10 | 4.13 | 2.5 | **5.52** | 3.46 | **4.68** |
| 合計 | **5.08** | 3.53 | 3.01 | **5.23** | 4.25 | 4.21 |

表4. 主文fo抑制 (±)・文末音調 (上昇・下降) と疑問文解釈：名古屋方言若年話者

| 文末音調＼主文fo抑制 | 主文fo抑制 (−) | | 主文fo抑制 (＋) | | 合計 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | YNQ | WHQ | YNQ | WHQ | YNQ | WHQ |
| 文末上昇 (↑) | **6.01** | 3.38 | 4.38 | 4.37 | 4.93 | 4.1 |
| 文末下降 (↓) | 4.82 | 3.82 | 2.48 | **5.73** | 3.88 | 4.58 |
| 合計 | **5.41** | 3.60 | 2.90 | **5.45** | 4.41 | 4.34 |

中高年話者が主文fo抑制と文末音調の韻律情報をもとにWH解釈、YN解釈を行っている (片方の解釈がもう片方の解釈より優勢となる) のに対し、若年話者は主文fo抑制を主な手掛かりとし、文末音調の重要性は相対的に低いことが、各値の合計部分 (**二重下線**と下線の分布) から確認できる。

いずれの世代においても「主文fo抑制 (＋)・文末下降↓」でWHQの自然性が最大に、「主文fo抑制 (−)・文末上昇↑」でYNQの自然性が最大になり、これら2例がともに最高点 (上位2つ) となっている。それと同時に、同じ組み合わせにおけるもう片方 (点線隣) の自然性は (それぞれ独立して回答されているにもかかわらず) 例外なく最低値2つとなっている。いずれの話者グループにおいても、上記2条件と疑問文解釈との関係について、統計的有意差が確認された ($p<0.01$ , ウィルコクソン符号化順位検定、Yates連続性補正のチェック済)。同様に、若年話者における文末音調の関与の相対的低さも確認された (図4も参照)。

なお、条件 (a) WH要素の音調については、図3,4でも確認したように、いずれのグループにおいても解釈にほぼ影響を及ぼさなかった (全ての条件下で最高値-最低値が、中高年話者で4.6-4.0、若年話者で4.68-4.19という狭い幅の中に収まっていた)。

## 5. 議論・考察

### 5.1. 中間句・アクセント句の形成と疑問文解釈

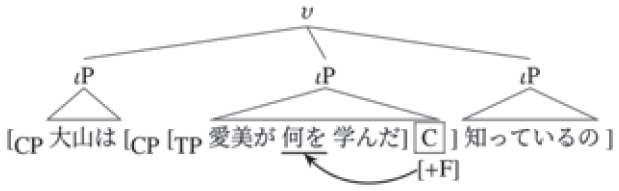
上記の分析結果をもとに、埋め込み疑問文解釈における統語・意味構造と音調との関係 (S-P対応) を理論的側面から考察する。

音韻的な韻律階層 (prosodic hierarchy) において、最上位に置かれる発話 (utterance; υ) とアクセント句 (accentual phrase; αP) との間に、中間句 (intermediate phrase; ιP) の存在が知られている (Pierrehumbert & Beckman 1988)。この中間句は、ダウンステップの続く領域として設定される。

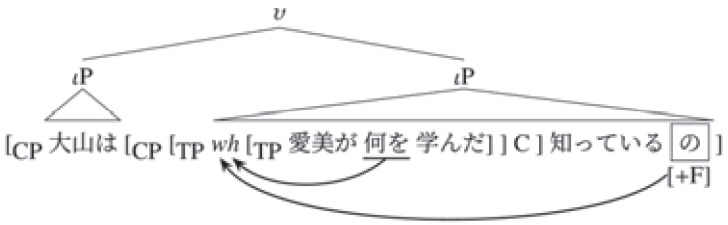
本稿で分析した埋め込み疑問文の解釈および方言差には、中間句の形成が重要な役割を担っており、その形成が方言の音調体系によって異なり、その違いが各方言の疑問文解釈における表面上の違いを生じさせている。以下、この点について論じる。

(6) と (7) は、それぞれYN解釈とWH解釈におけるS-P対応、すなわち、統語・意味構造と中間句(ιP)形成との関係を示したものである。各例文は便宜上、東京方言で表現しているが、他方言でも基本的に同様の構造を持つ。

(6)　YN解釈 (Short EPD)




(7)　WH解釈 (Long EPD)




YN解釈 (Short EPD) においては、(6) のように埋め込み部と主文述部とが別の中間句 (ιP) を形成するのに対し、WH解釈 (Long EPD) においては、(7) のように両者が一つの中間句 (ιP) を形成する。これらの操作によって、S-P間のマッピングが行われ、この点において各方言は共通する。重要な点として、中間句 (ιP) の形成方法が方言ごとに異なり、その違いが方言間の差異を生じさせている。

東京方言では、主文述語のピッチの立て直し (fo抑制(−)) によって埋め込み部と主文述部とが別の (2つの) 中間句を形成し、その結果としてYN解釈 (Short EPD) が生じる。それに対し、主文述語のfo抑制 (+) によりダウンステップを生じさせ、埋め込み部と主文述部を一つの中間句にまとめることによって、WH解釈 (Long EPD) が生じる (これらが (3a,b) として実現する)。

本研究が対象とする名古屋方言では、[F] の表示に関して、東京方言と共通の主文fo抑制に加え、文末音調も関与する。文末下降 (↓) が [−F] つまり、WH解釈 (Long EPD) の実現に関わり、それはとくに中高年話者において顕著である。このような特徴は他の3方言 (東京、関西、佐賀方言) には見られず、また、若年話者では顕著でなくなってきている。それは同方言若年話者における単純WH疑問文末の上昇音調の許容と関係すると考えられる (田中2024)。このような疑問文末音調の変化に関する詳細な分析は現在遂行中であるが、名古屋方言における中間句の形成、音調と疑問文解釈との関係は、以下の通りまとめられる。

(8)　名古屋方言の中間句形成

a.　(ιPどう洗うC)(ιP**聞いとるの**)↑　　b.　(ιPどう洗うC fo抑**聞いとる**の)↓

YNQ(Short EPD): fo抑制(−), 文末上昇　　WHQ(Long EPD): fo抑制(＋), 文末下降

さらに、松井・田中 (2026) で分析された佐賀方言 (無アクセント方言) と対照すると、佐賀方言は語にアクセント (ピッチ下降) がないため、fo抑制によるダウンステップを手段とした中間句形成が基本的に不可能である。このような音調体系を持つ方言では、(9) のような埋め込み部文末詞 (C) の高接/低接によって中間句の形成に違いを生じさせる。(9a) のように埋め込み部文末詞 (C) が低接すると (埋め込み部と主文述語との間のアクセント句分離により) 中間句 (ιP) が二分されYN解釈 (Short EPD) として実現するのに対し、(9b) のようにCが高接すると (アクセント句が一つにまとまることにより) 中間句 (ιP) が一つになりWH解釈 (Long EPD) として実現する。

(9)　佐賀方言の中間句形成

a.　(ιPどう洗うC)(ιP聞いとっと)　　b.　(ιP どう洗う C 聞いとっと)

YNQ(Short EPD): C(低接)　　WHQ(Long EPD): C(高接)

### 5.2.　補文標識と焦点解釈

次に、S-P対応の統語的側面 (S) について、とくに補文標識 (C) の統語・意味構造から考察する。統語的に焦点 [+F] を伴う「か」が (6) のYN解釈 (Short EPD) における埋め込み補文標識 (C) と典型的に対応するのに対し、[−F] を伴う「って」は (7) のWH解釈 (Long EPD) に対応する。このような [F] の値に関する文末詞の統語・意味的非対称性は、名古屋、関西、佐賀方言いずれの疑問文解釈においても重要な鍵となる。ただ、興味深いことに、関与の強さが方言ごとに異なる。

関西方言では、この違いがYN解釈とWH解釈を峻別する最も重要な手掛かりとなり、音調的手掛かりの重要度は相対的に低い (松井・田中2026)。つまり、関西方言において「か」を伴う (1) の文は、音調に関わらず (1a) のYN解釈が優先される。

これに対し、名古屋方言では、補文標識「か」に対してYN解釈が、「って」に対してWH解釈が優勢となる点ではいずれの方言とも共通するが、音調との組み合わせによっては、それらの対応関係が覆され、音調が優先される場合がある。(8a,b) の音調が統語・意味構造と矛盾する (S-P間のミスマッチが生じる) 場合、具体的には、埋め込み部文末詞「か」(YN解釈選好) に対して (8b) の韻律 (WH解釈選好) を伴う、反対に、「って」(WH解釈選好) に対して (8a) の韻律 (YN解釈選好) を伴う組み合わせにおいては、しばしば音調の方が解釈の手掛かりとして優先される。それは、図3,4において「か」のfo抑制または文末下降調が領域A (WH解釈) に、また「って」のfo非抑制または文末上昇が領域B (YN解釈) に入っていることからも明らかである。しかしながら重要な点として、それらはWH解釈/YN解釈の両極

ではなく中間的な位置にあり、典型的な疑問文解釈とはなっていない。各疑問文解釈の最高値 (両極) は、図3,4のように統語・意味構造と音調による予測が一致した組み合わせ、すなわち、WH解釈においては補文標識「って」に主文fo抑制と文末下降を伴う音調、そしてYN解釈においては補文標識「か」に主文fo非抑制と文末上昇を伴う音調の組み合わせである。

つまり、統語・意味構造 (S) と音調 (P) とが同じ予測をする組み合わせにおいて各解釈が最も典型的かつ排他的に選択されるのに対し、両者 (S-P) が異なる予測となる組み合わせの場合、それらの中間的な解釈が行われ、片方の解釈が優先される相対的な度合いは、各方言における統語・意味構造と音調との相対的関係によって異なるといえる。

## 6. 結びと課題

本稿では、名古屋方言二世代の埋め込み疑問文解釈に対する知覚調査分析を通して、次のことを明らかにした。(ⅰ) 疑問文解釈には、主文述語のfo抑制 (条件 (c)) が強く関与し、fo抑制を伴う文に対しては一貫してWH 解釈が得られやすいのに対し、それを伴わない文に対してはYN 解釈が得られやすい。(ⅱ) 文末音調（上昇/下降）(条件 (d)) も解釈に関与し、文末が上昇調ではYN解釈が、下降調ではWH 解釈が得られやすく、名古屋方言の特徴を反映する。(ⅲ) 埋め込み部文末詞 (か/って) (条件 (e), (b))は音調との組み合わせにおいて関与し、埋め込み部に「って」[-F] を持つ文が主文述語にfo抑制を伴う場合、WH解釈が得られやすいのに対し、「か」[+F] を持つ文がfo抑制を伴わず、文末上昇調の場合、YN解釈が得られやすい。

WHQにおける主文fo抑制については、名古屋方言において (表１、図2の特徴から) これまでほとんど検討されてこなかったが、WHを含む要素に何らかの形でピッチ下降を伴えば、表3,4のようにfo抑制の実現とWH解釈が可能である。本稿では、埋め込み部文末詞の低接によって主文fo抑制が可能になることを新たに示したが、注2で確認したように、それは単純疑問文においても同様に生起可能である。

また、埋め込み疑問文のWH解釈と文末下降との理論的関係については、とくに下降音調を伴う文末詞「の↓」が、主文述部fo抑制に加えLong EPD解釈を与えることを示した。焦点素性 [+F] に対応する、述部fo抑制および終助詞「の↓」の関係 (優先順位) と、それにもとづく疑問文解釈について、最適性理論を視野に入れた分析も今後の課題とする。

関連して、近年の名古屋方言では、WHQに対して文末上昇も許容する傾向にあり、YNQ/WHQと文末音調との対応が、相対的に弱くなっているようである。この点に関し田中・松井 (2025) は、単純WHQにおいても、中高年話者がWHQに対し図2のような文末下降のみを許容する傾向にあるのに対し、若年話者は同じ文に対し相対的に上昇調も許容すると報告している。名古屋方言における音調変化の実態とともに文末詞の音調・統語・意味の組み合わせと疑問文解釈との総合的関係についても検討の余地がある。

このような統語・意味構造と音調実現に関する制約の優先順位を総合的に捉え、また、方言間・世代間の異同関係を整理し提示すること、とりわけ、本稿で扱った方言と異なる音調体系を持つ方言を含めた、音調と疑問文解釈との包括的な関係について、記述・理論両面から分析することも今後の課題とする。

## 註

* 本稿は第39回日本音声学会全国大会 (神戸大学) で発表した内容をもとに、加筆・修正を施したものである。コメント、ご教示いただいた方々に感謝申し上げる。また本研究は、JSPS科研費基盤研究 (B)「疑問詞文のプロソディーに関する音声学・言語学の融合的・実証的研究」(課題番号: 23K20460, 21H00523, 代表: 田中真一) 、同基盤研究 (C)「日本語音素の異音における喉頭制御と口腔内制御に関する総合的研究」(課題番号: 22K00544, 代表: 松井理直)、および、NINJAL基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」(代表: 浅原正幸)の助成を受けている。調査にご協力下さった方々に、記してお礼申し上げる。

1 Igarashi (2019) はこのような文法構造と音調との表面上のミスマッチについて、無アクセント方言の今市方言を例に紹介している。無アクセント方言のみならず、フォーカス部にピッチ下降を伴わない方言 (例えば、当該名古屋方言の疑問詞疑問文) においても、同様のことが生じる。

2 本文でも指摘するように、従来、名古屋方言の疑問詞疑問文は、(疑問詞が無核のため) 図2のようなパターンのみが問題にされてきた。しかしながら、疑問詞部分が「どんな-も'ん」などのようにアクセントを持つ場合、「どんなーもんを fo抑制読んどるの」のように単純疑問文であっても後続述部にfo抑制によるダウンステップが生じ、東京方言と同様のパターンを示す。この点に関する詳細な分析は今後の課題とする。

## 参考文献

有田節子. 2007.『日本語条件文と時制節性』東京：くろしお出版.

犬飼隆. 2006.「尾張方言疑問詞疑問文の音調」音声文法研究会(編)『文法と音声』5, 77–92. 東京:くろしお出版.

三枝令子. 1997.「「って」の体系」『言語文化』34, 21–38. 一橋大学語学研究室.

田中真一. 2021.「名古屋方言疑問詞疑問文におけるピッチ変更」岸本秀樹 (編)『レキシコン研究の現代的課題』185–204. 東京：くろしお出版.

田中真一. 2024. 「名古屋方言疑問詞文における下降音調の生起について」JSPS科研費基盤研究 (B) 研究会 (代表：田中真一) ハンドアウト. 2024年3月9日, 神戸大学.

田中真一・松井理直. 2025.「方言音調体系と埋め込み疑問文解釈との対応関係：名古屋・関西・佐賀方言の対照」『Evidence based Linguistics Workshop 2025論文集』46–56. 国立国語研究所.

西垣内泰介・日高俊夫. 2010.「Wh構文の解釈と韻律構造」『日本言語学会第141回大会予稿集』272–277.

松井理直. 2011.「音韻部門における統語的焦点素性の韻律解釈」 *Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin* 14, 45–80. 神戸松蔭女子学院大学.

松井理直・田中真一. 2025.「埋め込み疑問文解釈の統語・意味情報と方言音調体系との対応関係—関西方言・佐賀市方言を中心に—」『第39回日本音声学会全国大会予稿集』220–225.

松井理直・田中真一. 2026.「WH構文における韻律構造再考」*Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin.* 29, 1–72. 神戸松蔭大学.

水谷修. 1960.「名古屋アクセントの一特質 (前半)」『音声学会会報』102, 8–10.

吉田健二. 2017.「東海地域西部方言のアクセントにおける「おそあがり」の音声実現の特徴」『第31回日本音声学会全国大会予稿集』43–48.

Igarashi, Yosuke. 2019. Dialect-specific prosodic phrasing in Japanese: With a focus on dialects without lexical tone contrasts. A paper presented at International Conference on Phonetics and Phonology 2019 (ICPP 2019). NINJAL.

Ishihara, Shin'ichiro. 2005. Prosody-scope match and mismatch in Tokyo Japanese Wh-Questions. *English Linguistics* 22(2), 347–379.

Pierrehumbert, Janet B. and Mary Beckman. 1988. *Japanese tone structure*. Cambridge: MIT Press.

Poser, William. 1984. The phonetics and phonology of tone and intonation in Japanese. Doctoral dissertation, MIT.

Selkirk, Elizabeth. and Koichi Tateishi. 1991. Syntax and downstep in Japanese. In: Georgopoulos, Carol. and Roberta Ishihara. (eds.) *Interdisciplinary approaches to language*. 519–543. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.